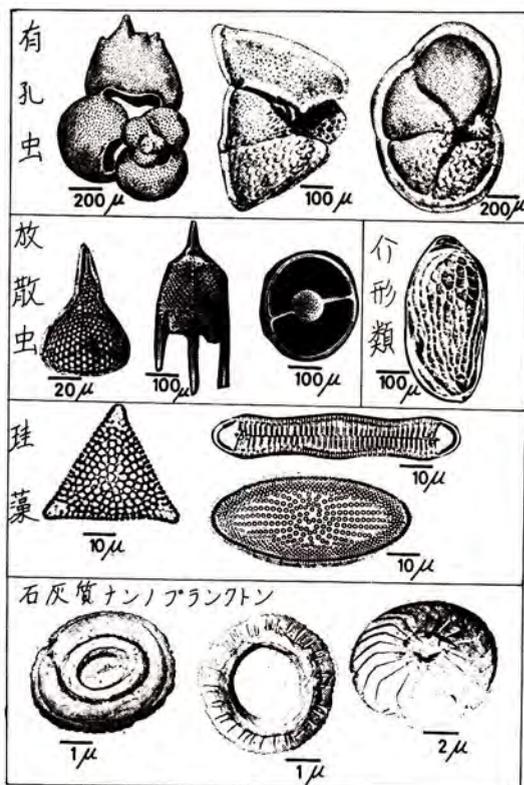


来の目的は化石として残された部分に肉付けし、形態の機能的意味を考え、どのような生活をしていたのか、その生理・生態に至るまで復元して過去の生物界を探究し、生物進化の筋道、さらにその生物の生活環境を明らかにすることである。

海洋の微化石、特にプランクトン化石では、海底に形成される遺骸群集はその直上の表層水中の生活群集と同一であるという前提に立ち、古海洋気候の推定が進められている。この前提に関しては、有孔虫・珪藻・石灰質ナノプランクトンで、現在表層水中で生活している群集と、その直下の海底の表面1cmの堆積物中の遺骸群集とはほぼ同一であることが観察されている。浮遊性有孔虫は大きさが50~250μのものが多く、5℃の海水中の沈降速度は0.15~2cm/秒で、5000mの海底に約1週間で到達する。石灰質ナノプランクトンの沈降速度は100m/年である。炭酸カルシウムは海水に溶け、700~1500mの水深で有孔虫殻は1日に0.2%が溶けるといわれている。この割合でいくと、石灰質ナノプランクトンは1年半で全部溶けることになる。しかし海底堆積物には多数含まれ、保存状態も他の微化石より良い。これに関しては次の報告がある。2ヶ月間2200mの水深に吊しておいた装置から、動物プランクトン橈脚類の排泄物と思われるものが数100個体発見され、約4万個の石灰質ナノプランクトンが含まれていた。これは重量0.8μgで、200m/日で沈降する。このようにプランクトンの遺骸が海底に達する時間は短く、遺骸群集はその直上の生活群集を反映していると考えて間違いないと思われる。底棲種の場合は、海底状態をそのまま反映している。

微化石においては、熱帯・亜熱帯・遷移帯・亜極帯・極帯でその群集組成が異なっており、海底柱状試料中の群集を詳細に調べることによって過去の気候変化を追跡することができる。また過去の水温を測定することも可能である。炭酸カルシウム CaCO_3 を形成する際炭酸イオン CO_3^{2-} を海水中より取り入れている。酸素には ^{16}O と ^{18}O の同位体があり、 $\text{C}^{16}\text{O}_3^{2-}$ と $\text{C}^{18}\text{O}_3^{2-}$ の比は温度に支配されている。したがって有孔虫殻の酸素同位体比を測定することによって過去の水温が求められ、現在では0.1℃の精度で古水温測定が行なわれている。このような測定が可能となり、微古生物学者を中心に気候長期研究・凶化・予測計画ともいべき Climate Long-range Investigation Mapping and Prediction Program と



いう計画が進められている。この計画の目的は、地球の規模で過去70万年間の気候変化を理解することである。気候変化は太陽エネルギーの入量変化もあるが、これを独自の振動に変える気圏・水圏の反応を無視できない。この反応を地球の規模で理解するため6000本以上の海底柱状試料が利用された。1973年には約17000年前の最終氷期の古水温・古塩分濃度が求められ、北太平洋の等温線・等塩分線が画かれた。今後、堆積学・氷河地質学などのデータが揃えば17000年前の気候図が書き出されるであろう。

以上のように、今後微古生物の研究を進めるには、より微視的な観察を行なうとともに生物学的基礎が必要であるが、生物学者にも化石に興味を持っていただきたいと思う。

(自然環境研究 助手)

三つの書評

本の発見

沈黙と言葉との間隙は男と女の間横たわる永遠の河のように無限に底無しであろう。それはまた正と負、正と零の絶対的な隔りにも似ている。しかし、人は、今日に至るまで心を言葉にたくしてさまざまな書物を残してきた。つまり、言葉にせざるをえないというのは、人の心の皮相と深層との間を互いにいきつもどりつする業のなせるわざかもしれない。なぜなら、言葉というのは、永遠の渾沌に、永遠に眼鼻をつけることであるからである。

上山春平・梅原猛「日本学事始」を読んで

門 秀 一

「日本学」という一種の学問が、今この国で発掘され、しかも読書界でひそかにブームを引き起しつつあるようである。

ところで「日本学」というのは、戦後この国で流行した「エリア・スタディ」とは若干趣きのちがうものらしい。私流に表現すれば、「日本文化の根源的理解」というものであって、一種の哲学であるらしい。

そして日本学という学問の創始者として、今その先端をゆく人が、梅原猛氏と、上山春平氏である。(梅原猛氏は、小生も面識があるが、京都大学の西洋哲学を出て、長く立命館大学につとめ、最近では京都市立芸術大学の学長をしている。わたしの知っている梅原氏は大学院の学生として、ニッチェの研究をしていた頃である。上山氏は現在京都大学人文科学研究所所長であり、若い頃は西洋哲学の中でも論理的な研究をされている。かれの「歴史と価値」「弁証法の系譜」という書は読むに値する名著である。上山氏はこの四月に「現代思想」の講師として、この総合科学部で集中講義をされるはずである。)この「日本学事始」という著書は、日頃から相互に影響しあっている二人が、あるいは対談で、あるいはそれぞれの講演を通じて、「日本学」というもののアウトラインを論じている書物である。

ところでこのような「日本学」の特徴として梅原氏は次のようなことを言っている。

「わたしは中学校のときに幾何がたいへん好きで

して……幾何学の天才(?)だったんです。幾何学では、補助線というものがあって、その補助線を発見することが実にうまくて、……そういう補助線というものを発見するときに、いままでわからなかったいろんなものがきれいに解決できてゆく」(131頁)

本書で論じられている「古事記」「日本書紀」の神話の解明についても、あるいは柿本人麻呂の生涯についても、その中にふくまれている多くのなぞを、藤原氏(特に不比等)の権力形成という「補助線」をつかって、うまく説明されているようである。

なぜアマテラスが年をとったため神であるか、ニギがその孫であって、幼帝でしかないのか、どうして建国神話の中で中心をなすのが、この二人の神々でしかないのか、というなぞは、持統帝が孫の文武帝に、元明帝が孫の聖武帝に位を譲ろうとする伏線ではなかったのか、そして不比等を実質的な権力者とした記紀の編集考が、このおばあさんから孫へという二人の女帝の老婆心をうまく利用して、次第に宮廷の権威をにぎろうとしたのではないか、というなかなかウウにしても面白い話である。いや仮説にしても面白い話である。

次に柿本人麻呂についても若干の説明をしておこう。柿本人麻呂については、万葉第一の歌人として万葉集の中でも高く位置づけられ、特にその第一巻、第二巻は主として柿本人麻呂を中心として展開されている。古今集では「うたのひじり」といわれてい

る。しかし、かれの宮廷における地位は低く（六位以下）、しかもしばしば国内を旅行して歩いている。いな、かれは歴史の正式文書の中には、一切その名前をすらすら出してない。

このなぞに対して、契仲をはじめ多くの万葉学者が困っている、中には折口信夫氏のようにかれを旅芸人のひとりとする異説をさへとなえているものもある。

これも梅原氏の説によれば、持統王朝の最盛期には、人麻呂は宮廷歌人として栄えていたらしいが、やがて藤原氏の覇権成立とともに、かれの姿は都からなくなり、旅にすることが多くなり、最後には石見の国で死んでいる。そしてかれの政治的失脚の原因も宮廷内のスキャンダルによるものらしいこと。そしてかれの死は、石見における刑死（特に水死）ではあるまいか。という風に梅原氏の推理は、進展する。かれは、藤原氏が嫌っていた天皇、皇子にの

み「皇は神にしませば」という挽歌をつくり、のちに藤原氏に嫌われ、官位を奪われて流罪に処されたところが、どこでも反体制的な態度を見せたところから、ついに石見の国で刑死に処せられたというのである。

筆者は、これらを批判する何の能力もないし、第一かれらが挙げている資料そのものも殆んど知悉していない。しかし、読んでみると推理小説を読むより面白い。そしてそんな大胆な解釈があるいは成立するかもしれないという気がする。

最近この二人を中心とした「日本学」が益々ブームになりそうである。あえて紹介の労をとったゆえんである。

「日本学事始」 小学館 680円

（比較文化研究 教授）

福永武彦『忘却の河』

深 萱 和 男

戦後の新しい文学は、多かれ少なかれ、戦前の文学に対する批判ないしは否定として出発したと言ってもよいでしょう。福永武彦もそのような戦後の新しい文学を代表する一人です。

彼は、マチネ・ポエチックに属していました。マチネ・ポエチックというのは、西洋の詩に倣って、定型と押韻を日本語の詩に実践しようと試みた詩の集団です。堀辰雄や立原道造たちの影響を受けた文学青年たちが、昭和17年ごろから始めたものですが、加藤周一や中村真一郎などもその仲間でした。彼らの活動は、戦争の激化のため一時中断され、戦後復活して、詩壇にさまざまな話題を提供します。日本語の風土にはいささか異和なその人工的詩の実験は結局失敗に終わったと見られますが、このような実験を試みたというところに、彼らの外国文学への傾倒と既成の日本文学への反逆の姿勢を読み取ることができます。

じじつ、加藤・中村・福永の三人が共著で出した『1946 文学的考察』という評論集には、古き悪しき日本文化への訣別の辞が高い調子で綴られています。戦時下の抑圧から解放された敗戦直後の数多い

発言の中でも、彼らの主張はきわだって大胆なものでした。とくに、福永の場合、より文学に即して、「文学の革命」すなわち「文学における人間の発言」の必要について繰り返し論じていて注目されます。

福永によれば、過去の日本文学は、独善的偏狭に陥っていて、真の普遍性をもった人間像をとらえてはいません。私小説からさらにモデル小説へと墮落の一途をたどる日本自然主義文学の系譜から、小説をフィクションによる本来の姿に「革命」しなければなりません。サルトルやスタインベックなど、今日では余りにも有名な欧米の文学者たちをいち早く紹介しつつ、特殊日本的文学世界からの脱却を福永は呼びかけます。（最近ほとんど口にされることのなくなった社会主義リアリズムにも言及しているところに、当時の文学的状況がうかがえますが、ここでは残念ながらその問題には立ち入る余裕はありません。）

福永は、その主張を彼自身の創作活動の中で実践して行きますが、彼の唱えるところが時代と彼自身の力量よりも少しばかり先行しすぎていたためか、その実践は必ずしも直ちに成功し一般に広く認めら

れたとは言えません。その点では、『暗い絵』の第一作でたちまち戦後派の騎手に迎えられた野間宏とは好対照をなすでしょう。福永の評価はむしろ最近になって次第に高まってきているようです。

前おきが長くなってしまいました。課題の『忘却の河』について述べなければなりません。

自然主義的な写実小説を読み馴れた眼から見ると、おそらくこのような福永の作品はわかりにくい小説ということになると思います。たとえば時間の問題です。ふつうの写実小説ならば、小説中の時間はほぼ物理的自然的時間と並行して進みます。仮りに話が過去に遡ることがあっても、それは現在とは明瞭に区別される過去のこととして、その間の時差の調整に読者が迷うことはありません。ところが、この『忘却の河』では、物理的自然的時間の流れは、作中人物の内面の意識下の時間によって逆流させられ、その二つの時間の交錯が、初めての読者をとまどわせます。次のような例です。

社長、どうなさいました、と私は呼びかけられ、社員の一人が訝しげに顔を寄せて来るのに気がついた。綺麗ですなあ、とその男は私の向いている方向に顔を向け、きらきら光っているビルの窓の方を見上げ、台風も大したことがなくて結構でした、と言った。綺麗だとその男は言ったのだが、それまで私は、雨に濡れた上に日の射したこれらの硝子窓が綺麗だと思って見ていたわけではない。それはまるで別のものだった。しかしどうしてそれを説明する必要がある。また恐らく説明する能力もないに違いない。私はその男と一緒にビルの玄関にはいり、一緒にエレベーターに乗った。エレベーターの戸がしまり、それはゆるやかに昇り出した。

スコールが猛烈な勢いで密林に叩きつける中を、彼は走っていた。彼は片手に水筒を掴んで、もとの場所へと逸散に走っていた。……

前の段落と後の段落の話は何の脈絡もなしに、全く唐突に並べられています。その二つの段落は「私」と「彼」という二人の人物の全然別箇の話のように見えます。しかし、この二人は実は同じ人物で、この話は「私」なる中年実業家藤代が、独白的に綴るといって進んでいるのです。「彼」すなわち過去の「私」は、かつて戦地でスコールに遇った……そして、そのときの体験が、現在の「私」の脳裡に

離れがたく焼きついていて、台風の景色を眺めながら「私」の意識は過去へ引戻されて行きます。読者にとって「私」から「彼」への主語の転換が突然であると同様、時間のそのような遡行は不意のことです。

そうした人物の意識下の時間の交錯遡行を、作者は、何の外部的説明や描写も抜きに、もっぱら作中人物の独白を写すという方法で進めて行きます。

このような方法によって作られた小説から次第に読者に見えてくるものは、藤代の拭いがたい汚穢の姿であり、人間の業とでも言うべきものです。この作品は、藤代の話に続いて、彼の長女、次女、病妻、そして長女と淡い交際をしている美術評論家を、順次同様の手法で独白的に登場させつつ、それぞれの人物が内部に秘めている苦悩を浮き彫りにして行きます。これまで生きてきた生の流れが長ければ長いほど、苦悩は深く生の流れは重く澱んで行きます。『忘却の河』とは、流れを止め、あらゆるがらくたを浮べつつそれ自体が少しずつ死んで行く河のことではないかと藤代は考えます。がらくたとは言ってもなく過去に重ねてきた罪であり、その罪から救われる道はどこにあるのか、藤代の投げかける問いは、読者に暗く響いてきます。

人間を内側から照射しようとするこうした手法を、福永は、二十世紀外国文学に学びつつこの作品によってたしかに一步進めることができたと言ってよいでしょう。このような手法は、中村真一郎や井上光晴などの作品にも共通に見られます。

ただ、いくらか注文めいたことを言わせてもらえば、『忘却の河』の投げ出した主題は、その終末において、いくらか重力を失っているように思えます。それは、作者が、例の探偵小説趣味を発揮して解決への手がかりをほのめかしたからではないかと見るのは、ぼくのひがめかも知れませんが、そのところを井上光晴の『地の群れ』などと比較してみるのもおもしろいでしょう。紙数が尽きました。それこそが今日のリアリズムの問題だとだけ言っておきましょう。

(日本研究 助教授)